郡家町文化財報告書 11

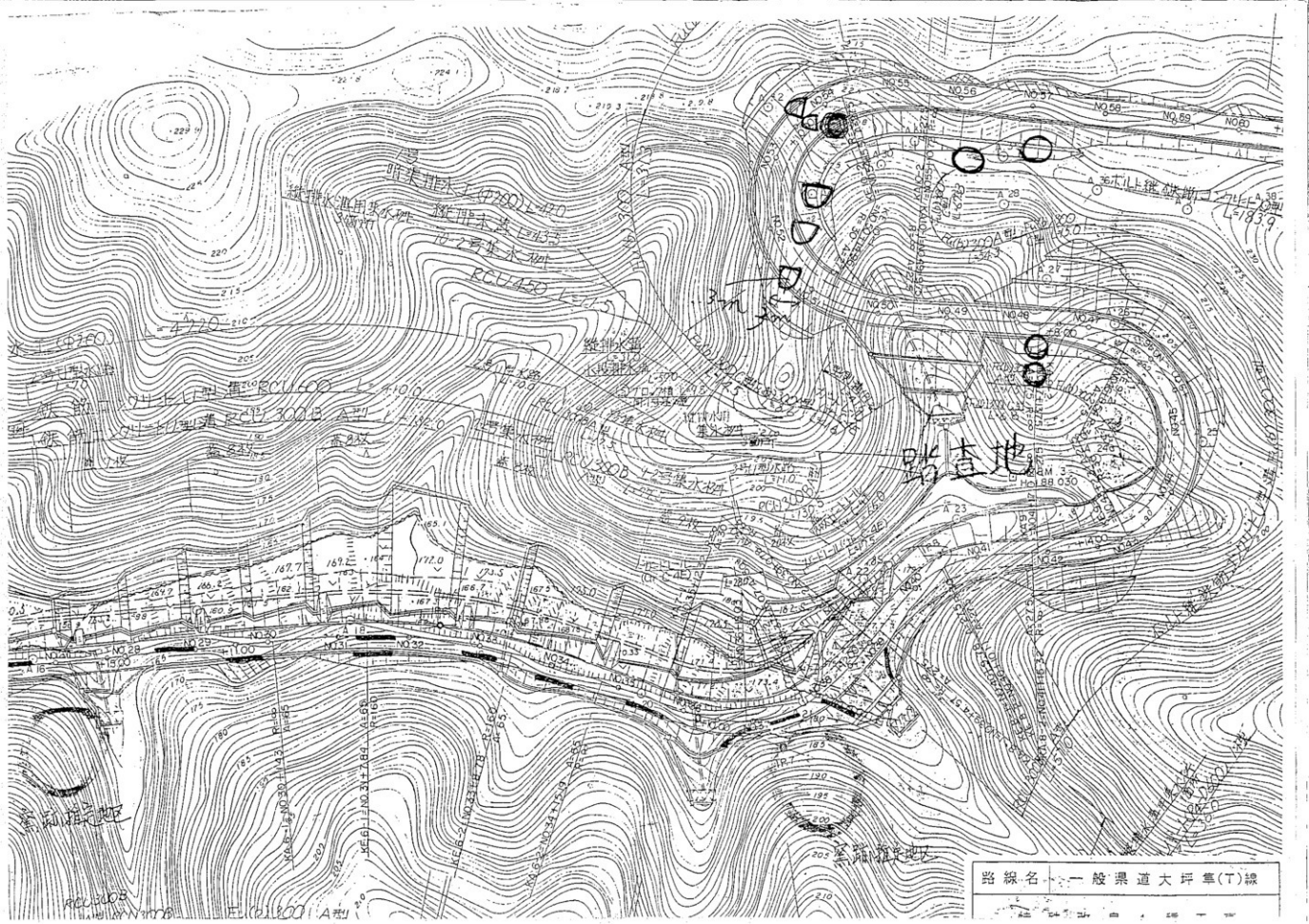
鳥取県八頭郡郡家町

花原窯跡群・I

（県道大坪・隼停車場線
建設に伴う試掘調査）

1989・9

郡家町教育委員会


踏査地
路線名 一般県道大坪草(T)線

序　　文

この発掘調査報告書は、平成元年度の国庫補助事業として実施した本町内花原地区に所在する花原窯跡群の調査記録です。

郡家町内には数多くの原始・古代遺跡が多く存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えております。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人の生活を物語る歴史資料であり、後世に継承していくべき貴重な国民の財産であります。このような認識のもと、郡家町教育委員会では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関との協議を重ね、また地元の方々の深いご理解をいただきながら文化財保護行政を進めているところです。

さて、本年度に実施しました発掘調査も関係各位のご協力によりまして、無事所期の目的をはたしここに報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではありますが、町民各位ならびに関係各位のご利用に供していただければ幸いです。

平成元年９月

郡家町教育長　北　村　一　利

例　　言

1．本書は、平成元年度に国、県の補助金を得て郡家町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2．調査を実施した遺跡は、鳥取県八頭郡郡家町大字花原字岡山・汁谷・奥森口・森口ほかに所在する花原窯跡群である。

3．本書に用いた方位は、遺跡分布図は真北を示し、その他は磁北を示す。

4．本書に用いた記号は、Ｔはトレンチの略号である。

5．写真図版中の遺物番号は、遺物実測図の遺物番号に対応する。

6．遺物実測図のスケールは、土器は1/3である。

7．本書の執筆、編集は中野知照が行った。

8．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、郡家町教育委員会に保管されている。

9．発掘調査の体制は、下記のとおりである。

発掘調査主体　郡家町教育委員会　教育長　北村　一利
調査主任　中野　知照
事務局　社会教育次長　岡嶋　英二
社会教育係長　丸山　勉
社会教育主事　市村　茂
調査指導　鳥取県教育委員会文化課

本 文 目 次

序　文
例　言
Ⅰ　発掘調査にいたる経過……(1)
Ⅱ　花原窯跡群の位置と環境……(2)
Ⅲ　発掘調査の概要……(3)
Ⅳ　小結……(18)

挿 図 目 次

第1図郡家町遺跡分布図……(5･6)
第2図花原窯跡群(汁谷)調査地位置図……(5･6)
第3図花原窯跡群試掘トレンチ配置図……(5･6)
第4図花原窯跡群試掘トレンチ土層断面図(7･8)
第5図花原27号窯遺構検出状態図……(11)
第6図D地区出土遺物実測図……(12)
第7図A・E地区出土遺物実測図……(12)
第8図第7トレンチ出土遺物実測図……(12)
第9図花原10号窯出土遺物実測図……(12)
第10図C地区灰原出土遺物実測図……(13)
第11図C地区灰原出土遺物実測図……(14)
第12図花原3･27号窯出土遺物実測図……(15)

図 版 目 次

図版1　〔1〕第27・28区調査前全景(東より)　〔2〕第1・1'トレンチ完掘状況(北より)
〔3〕第6トレンチ完掘状況(北より)　〔4〕第5トレンチ完掘状況(西より)
図版2　〔1〕第30～32区調査前全景(東より)　〔2〕第8トレンチ完掘状況(北より)
〔3〕第7トレンチ西壁土層断面状況(南より)　〔4〕第7トレンチ西側拡張部、土坑状遺構(東より)
図版3　〔1〕第33・34区調査前全景(東より)　〔2〕第2トレンチ完掘状況(北より)
〔3〕第2トレンチ、灰原土層断面状況(南より)　〔4〕花原10号窯窯体床面検出状況(南より)
図版4　〔1〕第35区調査前全景(東より)　〔2〕第3トレンチ完掘状況(南より)
〔3〕第37区調査前全景(東より)　〔4〕第4トレンチ完掘状況(南より)
図版5　〔1〕第42区調査前全景(南より)　〔2〕第12～17トレンチ完掘状況(東より)
〔3〕花原3･27号窯検出状況(東より)　〔4〕花原3号窯窯体断面状況(東より)
図版6　〔1〕第12トレンチ完掘状況(南より)　〔2〕第12トレンチ南西隅、炭・焼土検出状況(東より)
〔3〕第13トレンチ完掘状況(北東より)
〔4〕第13トレンチ西壁土層断面状況(東より)
図版7　トレンチ出土遺物
図版8　トレンチ出土遺物

Ⅰ　発掘調査にいたる経過

花原窯跡群は、郡家町の北側を西流する私都川流域の丘陵地に散在する私都古窯跡群の中の小群である。郡家町花原地区に所在する窯跡は、その数27基余を知られ私都古窯跡群の中では最大規模の窯跡群である。同窯跡群は、花原地内の西赤谷、森口谷、汁谷、猪ノ谷、穴住谷、本谷、相谷、志山路谷において灰原や須恵器の散布によって、その存在が知られていた。

このように窯跡の密集した花原地内を経由し、西御門に通ずる県道大坪・隼停車場線の建設計画が明らかになったため、郡家町教育委員会は鳥取県埋蔵文化財センターと工事予定地に当る森口谷、汁谷の分布調査を実施した。その結果、これまでに確認されていた窯跡とその周辺で須恵器の散布の状況が判明した。須恵器の散布状況と窯体との位置関係は現状では把握し得ないため、試掘調査を行うことによって窯跡の所在を確認する作業が必要となった。

郡家町教育委員会では、工事予定地内全域にわたって試掘調査を行い、窯跡の所在の確認作業を実施することとし、平成元年４月より現地作業に着手した。

調査は、郡家町教育委員会が調査主体となって実施した。調査は、県道予定地が林道に沿って計画されているため、林道崖面の精査を行い、その結果によって斜面にトレンチを設定した。これらの調査の結果、３基の窯跡と２ケ所の灰原および土坑状遺構１ケ所が確認されるにいたった。

試掘調査は、平成元年４月21日から現地での調査準備を開始し、当該地区の抜開、トレンチ掘削等の作業にはいった。実測、写真撮影等の作業を経て、６月20日までに現地作業を終了した。整理、報告書作成作業は６月21日より行い、７月19日をもって全ての作業を終了した。調査に際して以下の方々のご協力を得た。記して深謝いたします。

調査協力　鳥取県郡家土木事務所
鳥取県埋蔵文化財センター
作業協力　清水好夫、山本義一、田中政明、清水なみ子、木村絹子、柳原まゆみ、
福田和美、伊藤恵美子、松岡朋子

Ⅱ　花原窯跡群の位置と環境

地理的環境・歴史的環境

花原窯跡群は、ＪＲ郡家駅の西方約３kmに位置し、鳥取県八頭郡郡家町大字花原字西赤谷、森口、汁谷、猪ノ谷、穴住谷、本谷、相谷、志山路谷に広がる。

郡家町は、鳥取県東部の最大河川の千代川に流入する支流の一つである私都川流域に立地する。北は鳥取市と国府町に接し、西は河原町、南は船岡町と八東町に接する。東は、私都川が源を発する扇ノ山を擁し、兵庫県境に接する。私都川は町内を「Ｎ」状に流れ下流域に肥沃な谷平野を形成し一旦八東川に流れ、その後千代川に合流する。

花原窯跡群が位置するのは私都川左岸の下流域である。私都川は、郡家町中央部を北西から南西方向に流れを屈曲させる部分の南側に砂礫台地を形成している。この砂礫台地に面した丘陵斜面に山路、花原、山田、下坂、奥谷窯跡群が立地しており、総称して私都古窯跡群と呼んでいる。また、私都川の中流域から上流域にかけて、篠波、福地の各地区でも窯跡が確められており私都古窯跡群に含まれている。

郡家町の歴史的環境は、遺跡の密集度の高さが知られる。郡家町南部の西御門、私都川の下流末端部の万代寺においては、縄文時代後期の石斧や深鉢形土器の出土をみている。

弥生時代の遺跡は少なく、万代寺遺跡の木棺墓群。下坂字東堀平より出土した銅鐸の存在が知られるのみである。しかし、これらの遺跡は段丘上あるいは丘陵斜面に立地しており、私都川周辺の肥沃な沖積低地を生産基盤とした農耕集落の広がりが想像される。

古墳時代になると遺跡の数は増加し、私都川下流域の丘陵斜面には隙間なく古墳が造られるようになる。郡家町では前期に該当する古墳は確認されていない。中期後半以降、飛躍的に古墳の数が増加する。久能寺の北方、八頭高校の東側の丘陵に埴輪を囲繞させた径約20m、高さ3.6mの御建山古墳が現われる。同墳は調査がなされているが詳細は明らかではない。出土している埴輪は、家形・人物・動物などの形象埴輪と円筒埴輪がみられる。円筒埴輪は、底部調整を施しておらず、５Ｃ末から６Ｃにかけての私都川流域における盟主の古墳といえる。後期になると、郡家・宮谷地区に寺山古墳（全長37.5m）、宮谷１号墳（全長32m）の二つの前方後円墳が造られている。いずれも、御建山古墳に続く時期の盟主墳と思われる。また、この時期になると、私都川下流域を見下ろす丘陵斜面には、径10m前後の横穴式石室を主体とした群集墳と石棺を主体とした群集墳が造られている。もっとも密集した地域は、郡家町北西部の霊石山山麓、南部の久能寺地区、北東部の私都川中流域を中心とした地域である。これらの地域は、寺院跡や官衙跡ならびに、これらに関連の深い窯跡群などがみられる地域である。

霊石山山麓では、白鳳後代後期の法起寺式の伽藍配置をもつ土師百井廃寺の存在が知ら

れている。この土師百井廃寺で使用されていた瓦片や鴟尾片が、郡家町奥谷の奥谷瓦窯跡の出土品の中にみられる。

近年調査された万代寺遺跡では、八上郡郡衙跡と考えられる掘立柱建物群を検出している。建物群は東西に分かれ、西側の建物群は性格が判然としない。東側は、約99×97.5m区画の溝と柵列に囲まれた中に3棟の建物が確認され、杯・壺や円面硯を出土している。これらの須恵器は、私都古窯跡群の一つである花原窯跡群から供給されたものと思われる。

これらの寺院・郡衙のみならず、郡家町の北方約10kmに位置する因幡国府にも供給先をもった窯跡群が、花原窯跡群をはじめとする私都古窯跡群であるといえる。

花原窯跡群の概要

花原窯跡群は、郡家町大字花原地区の南方に所在し、同地区より扇状に広がる谷あいの丘陵裾部に分布する窯跡群である。

同窯跡群は、花原地内の西赤谷、森口、汁谷、猪ノ谷、穴住谷、本谷、相谷、志山路谷の標高150mから300mの地点に1～7基が立地している。

同窯跡群の存在は他の山田、下坂、奥谷、山路、福地窯跡群と同様に、「鳥取県生産遺跡分布調査報告書」によって明らかにされている。しかしながら、同報告書に記載されている窯跡は灰原の存在や須恵器の散布によって推定されており、窯体の位置までは確定されていない。崖断面に窯体の一部が露呈（山田1号窯）した例もみられるが、ほとんどは窯跡の位置が判然としない。また、花原2号窯のように数十年前まで操業されていた炭焼窯を須恵器窯と見誤っている例もみられる。

今回、試掘調査を行った花原窯跡群は、森口、汁谷地区である。同地区には、花原2・3・10号窯の存在が知られていた。このうち花原2号窯は土取りによって消滅しているが、「鳥取県生産遺跡分布調査報告書」に記載された略図と、花原10号窯の対岸に所在する炭焼窯と類似しており須恵器窯とは考えられない。

この炭焼窯は、各地に築かれており、その立地条件は須恵器窯のそれと同様である。従って、須恵器窯を再利用したりしている場合も想定しうるが、調査の際は充分な検討が必要であると考えられる。

Ⅲ　発掘調査の概要

調査の方法と経過

今回、試掘調査の対象となった花原地内森口、汁谷地区の県道予定地は、南北にのびる丘陵の東斜面裾部に計画されていた。斜面の裾部に既存する林道をほぼ踏襲し、斜面の一部を削って谷側に埋め県道を設置するよう設計がなされていた。

このため、調査区の地区割りは、道路のセンター杭間を一区割とし杭番号のNo.0～No.1

を１区……No.40～No.41を40区と呼称することとした。調査の対象となる区間はNo.15より始まりNo.43までとしたため、今回の地区割は15区～42区を設定した。

調査に当り、県道予定線のほぼ全長に既存林道の崖面が露呈しているため、この崖面の精査を第一に行うこととした。この崖面精査によって、灰原・窯体などの遺構の検出および須恵器などの遺物の出土が認められる地点、またその存在が充分に想定しうる部分を中心に、斜面上方にトレンチを設定して調査を行った。

調査の結果、崖面精査とトレンチの発掘により27・28区、31区に設定した第７トレンチ、33区の第２トレンチ、35区崖面、37区崖面、42区崖面において、遺構および遺物の確認がなされた。これらの各地区をそれぞれＡ～Ｆ地区と呼称することとした。

これらの各地区のうち、遺構が確認されたのはＢ地区の第７トレンチで土坑状遺構が検出され、Ｃ地区の第２トレンチでは灰原と窯体の一部が検出された。また、Ｄ地区では窯体２基と灰原の一部が確認されるにいたった。他の地区では、工事予定範囲内での遺構の存在は考えられない。調査したトレンチについては、平面図および土層断面図を作成し、写真撮影を行った。

トレンチ調査の概要

(1)Ａ地区の概要

Ａ地区は、道路センター杭No.28付近の崖面精査中、須恵器片を出土したことにより27区～29区を範囲とする。工事予定地内の斜面に平行に北方から第５、第１、第1'、第６の各トレンチが位置する。

第５トレンチ（第４図）

Ａ地区の最北部に位置する。西方にのびる谷あいの北斜面に設定したトレンチで、表土下20～46cmで地山面に達する。遺物は検出されなかった。

第１・1'トレンチ（第４図）

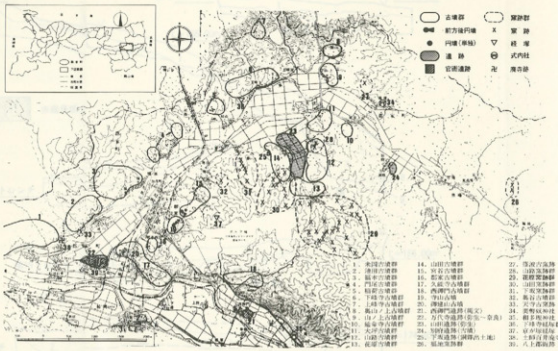
第５トレンチの南側に位置する。西方にのびる谷の南側斜面に設定したトレンチであり、崖面精査時に須恵器片の出土のみられた地点であるが、トレンチ内からの遺物の検出はみられなかった。

第６トレンチ（第４図）

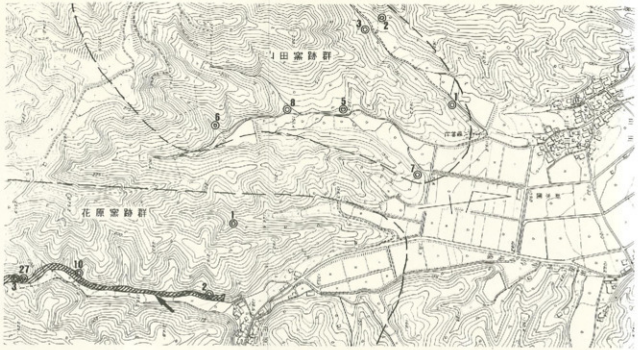
第１トレンチの南側に位置するトレンチで、表土下20～42cmで地山面に達する。遺物の検出はみられなかった。

(2)Ｂ地区の概要

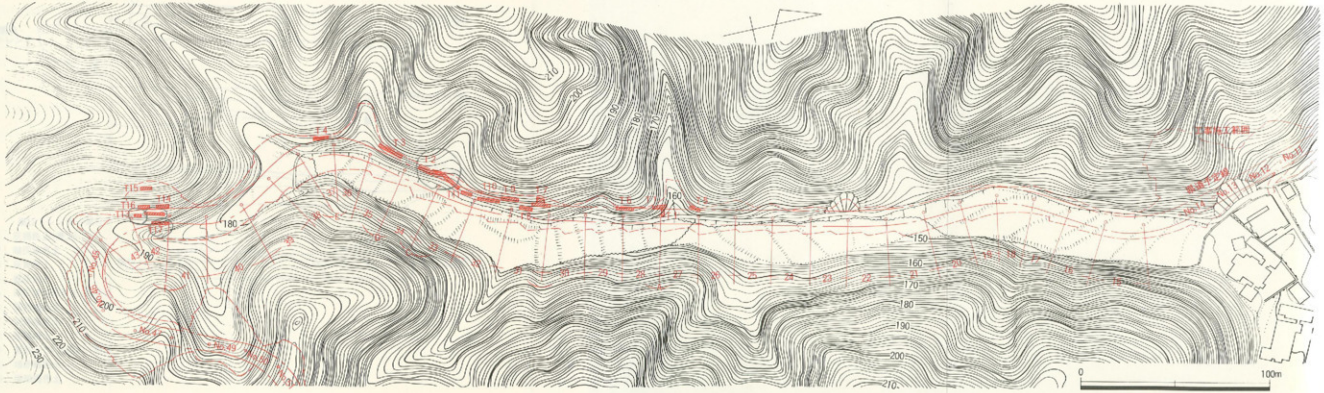
Ｂ地区は、30～32区を範囲とする。崖面精査により遺物の検出はみられなかったが、崖面に黒褐色土の堆積層がみられたことで、斜面に第７、第８、第９、第10、第11の各トレンチを設定した。第７トレンチでは遺物の検出と黒褐色土の広がりがみられたことで、西



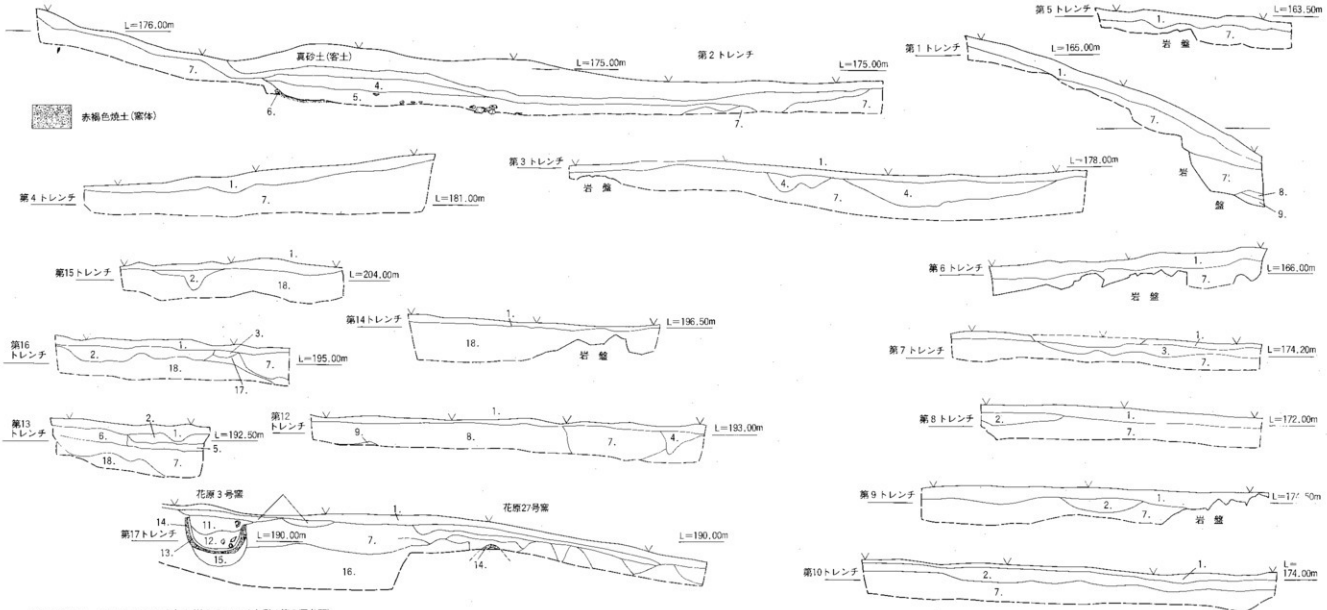
第１図　郡家町遺跡分布図



第２図　花原窯跡群（汁谷）調査地位置図、矢印調査地



第３図　花原窯跡群試掘トレンチ配置図



第12トレンチ～第17トレンチの土色表(第17トレンチ右側は第5図参照)

1．灰褐色土(表土)
2．暗灰黄色土
3．灰黄色土
4．褐灰色土
5．暗灰黄色粘質土(炭を多量に含む)
6．灰黄褐色土
7．淡黄褐色土
8．暗褐色土
9．黒色土(炭を含み、焼土面を有する)
10．暗赤褐色土
11．極暗褐色土
12．極暗赤褐色土
13．灰オリーブ褐土(窯体床面及び窯壁)
14．赤褐色粘土
15．極暗褐色土(窯壁塊を含む)
16．暗灰黄色粘質土
17．明褐色粘質土
18．淡橙色礫土

第1トレンチ～第11トレンチの土色表

1．灰褐色土(表土)
2．黒褐色腐植土
3．暗褐色土(炭・土器片を含む)
4．褐灰色土(須恵器片を含む)
5．黒褐色土(炭・須恵器・窯壁を多量に含む)
6．赤褐色焼土
7．明黄褐色土
7．明黄褐色礫層
8．暗赤灰色砂層
9．明赤灰色砂層
地山

第4図　花原窯跡群試掘トレンチ土層断面図

側に拡張部を設けた。

第7トレンチ（第4図）

B地区の最北部に位置する。表土下10～45cmの暗褐色土層上面が遺構面である。トレンチ中央部より北側に広がり、炭・土師器片を検出する。暗褐色土は西側にも広がりをみせ急傾地ではあるが2m×3m、深さ約20cmの浅い土坑状を呈す掘り込みがみられた。

第8トレンチ（第4図）

第7トレンチの南東側の斜面下方に位置する。崖面精査中に黒褐色土の堆積が認められた地点の上方に当る。表土下30～54cmで地山に達する。遺物の検出はみられなかった。

第9トレンチ（第4図）

第8トレンチの南西側に位置する。表土下10～70cmで地山（岩盤）に達する。第8トレンチの南西隅部分で認められる黒褐色土は、第9トレンチでもみられるが、腐植土層であった。このトレンチ内より遺物は検出されなかった。

第10トレンチ（第4図）

第9トレンチの南側に位置する。表土下20～46cmで地山に達する。遺物はみられない。

第11トレンチ（第4図）

第10トレンチの南側に位置する。表土下30～65cmで地山に達する。遺物はみられない。

(3)C地区の概要

C地区は、33・34区を範囲とする。崖面精査により灰原断面を検出し、須恵器の散布範囲を考慮し第2トレンチを設定した。

第2トレンチ（第4図）

C地区の中央部の谷あいの平坦地に設定したトレンチである。谷中央部の平坦地は耕作地として利用されたらしく厚さ約60cmの客土がみられた。客土下に地表面が遺存していた。この表土下15～20cmから70cmに黒色土の堆積がみられ、多量の窯壁塊、炭、須恵器片を含有した灰原層をなしている。この灰原は、道路センター杭No.34付近より北側の33区中央付近までの範囲に認められる。また、No.34杭の西側部分では、灰原に埋没した状態で窯体の一部を検出した。この窯体は、検出状態からみて焚口部から前庭部にかけての範囲である。南側に遺存する窯壁の状態により、操業停止後他の窯より排出された窯滓等によって埋没したものと考えられる。尚、「鳥取県生産遺跡分布調査報告書」に記載された花原10号窯が該当する窯跡と思われる。

(4)D地区の概要

D地区は、35区を範囲とする。崖面精査により須恵器片の散布がみられた地点である。同地区に設定したトレンチの表土下においても須恵器片の出土がみられた。

第3トレンチ（第4図）

35区中央部の西側に位置する。トレンチ中央部から北側にかけて表土下15～85cmの褐灰色土層の落ち込みがみられる。この落ち込みはトレンチを東西に横切る溝状を呈している。この褐灰色土中より須恵器片の出土をみた。

(5)E地区の概要

E地区は、37区を範囲とする。崖面精査により須恵器片を検出し、表土下において微細な炭と焼土がみられたことで第4トレンチを設定した。

第4トレンチ（第4図）

37区西側の斜面上方に位置する。表土下12～45cmで地山面に達する。このトレンチ内より遺物は検出されなかった。

(6)F地区での概要

F地区は、42区を中心として41区、43区の一部をその範囲とする。39区から43区にかけて行った崖面精査では、41区南端より42区にかけて須恵器片の検出がみられた。西側に広がる丘陵斜面は急傾斜であるが、所々にややテラス状の段がみられ窯跡が存在する可能性が推察された。斜面に平行に第12、第13、第14、第15、第16、第17の各トレンチを設定した。

第15トレンチ（第4図）

F地区丘陵斜面の最も高位に位置する。地表下10～30cmで地山面に達する。地山面に掘り込まれた様な落ち込みがみられるが、不明である。遺物の検出はみられない。

第14トレンチ（第4図）

第15トレンチの東側の斜面下方に位置する。地表下10～20cmで地山面に達する。遺物の検出はみられない。

第16トレンチ

第14トレンチの南側に位置する。地表下30～60cmの暗灰黄色土層上面が遺構面と考えられる。トレンチ北端の遺構面より明褐色粘質土の掘り込みが認められ、窯体構築に関連する土層と考えられる。

第12トレンチ（第4図）

第16トレンチの北側に位置する。地表下10～20cmで遺構面に達する。トレンチ南端では、地表下70cmで炭を多量に含む黒色土層の広がりがみられた。この黒色土の下面は赤褐色焼層が確認されており、窯体の一部であることは充分に考えられる。

第13トレンチ（第4図）

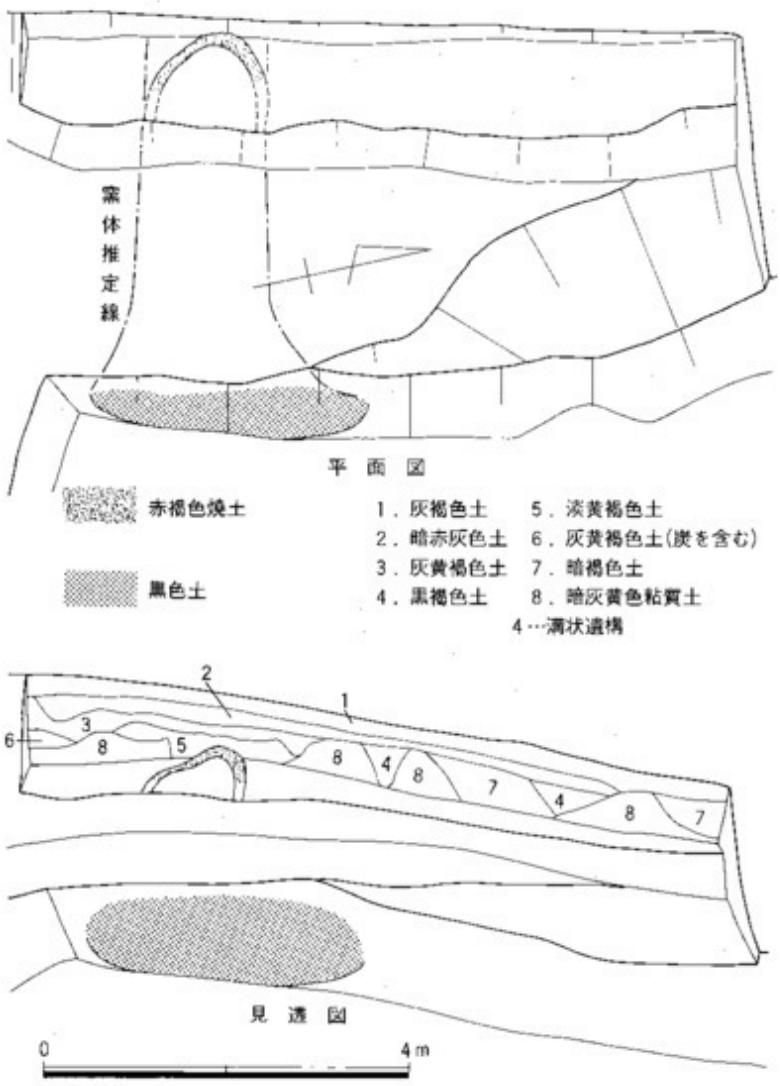
第16トレンチの東側の斜面下方に位置する。崖面に露呈している花原3号窯の延長上に設定したトレンチであるが、3号窯の窯体は伸びていなかった。しかし、3号窯窯体の構築に際した土木工事の痕跡がみられた。即ち、地表下20～40cmで遺構面に達し、窯体周辺を堅固にするため炭を多量に混ぜた暗灰黄色粘質土層をはじめ、灰黄色粘質土層などの堆

積がみられた。

第17トレンチ（第4図）

42区の崖面に設定したトレンチで花原3号窯の北側に位置する。表土下5～20cmで遺構面に達する。遺構面は10～30cmの焼土の混じった暗赤灰色土の広がりがみられる。この暗赤灰色土は花原3号窯でも窯体の上部を覆う様に検出されている。第17トレンチでみられる場合も、窯体の上部を覆った構築土と思われる。花原3号窯より北側へ6m～8mの地点で地山を溝状に掘り込んで窯体が築かれているのが検出された。この窯体は天井部の一部が陥没しているが、窯壁外周の赤褐色焼土層がアーチ状に遺存している。トレンチ内に遺存する部分は燃焼部の当りと思われ、トレンチ下方の一段下の崖断面には前庭部あたりと考えられる黒色の灰層の堆積が認められる。

窯体の主軸はN77°Wを示す。斜面に直交して築かれている。窯体は、地山面を2m程の幅でU字形に掘りくぼめ築いており、窯の周囲には排水のための溝状遺構もみられる。この溝状遺構は、第12トレンチの北側にも同様の掘り込みがみられることから、広範囲に広がることが予想される。2層の暗赤灰色土は、花原3・27号窯の上面を広く覆っており、3・27号窯構築に際してのものではなく、第12トレンチ南側で検出されている焼土・黒色土の広がりとの関連が考えられる。この場合には、試掘で確認された2基の窯跡以外にもその存在が充分に考えられる。



第5図　花原27号窯遺構検出状態図

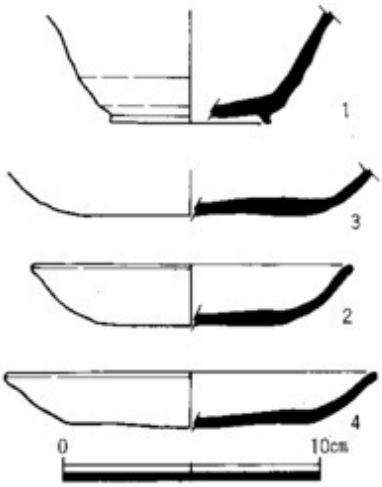
検出された遺物

花原窯跡群試掘調査によって検出した遺物は、６ケ所からの出土で、33×49×30cmを測るコンテナ２箱分がみられた。その大部分は、花原10号窯とその周辺の灰原よりのものであった。遺物は須恵器が主体で、花原10号窯では蓋・杯・皿・壺・甕などがみられた。花原３・27号窯では杯・椀・皿・甕がみられる。

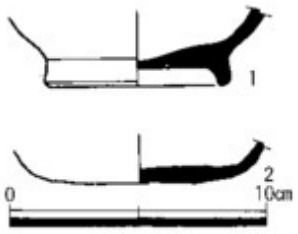
出土した遺物の整理は、現地調査終了後に行った。本書では整理期間の都合上、一部の遺物について図化作業を行った。ここでは、一括資料と考えられる遺物を取り上げ、完形あるいは完形に復元できるものを図示することに努めた。また完形に復元し得なくとも、単独で出土した遺物についても図示し、法量を計測し遺物の観察によって分類を行うこととした。

その結果、個々についての詳述は本書では省略するが、類別された器形を杯A・杯B、蓋A・蓋B、と呼び、その各々で大小の関係にあるものを杯AⅠ・杯AⅡ……、と細分した。このように同一記号のもとにまとめた同一系列の土器のうちで、手法などの点でさらに分類が可能なものをa・b・cの記号をつけて区別した。

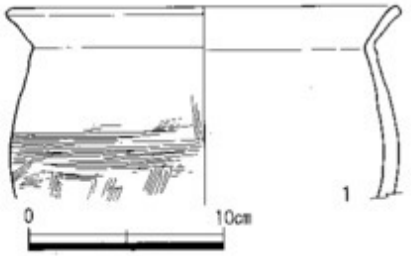
杯Aは平底を呈し、杯Bは断面四角形および断面三角形の高台を有する。蓋Aは平坦な頂部から屈曲した縁部をもち、蓋Bはなだらかに縁部につづく。整形手法のちがいは、粘土切り離し法のうちaは、ヘラ切り未調整、bはヘラ切りまたは回転糸切りの後ナデ、ヘラ削りにより一次調整を消している。cは回転糸切り未調整を示す。



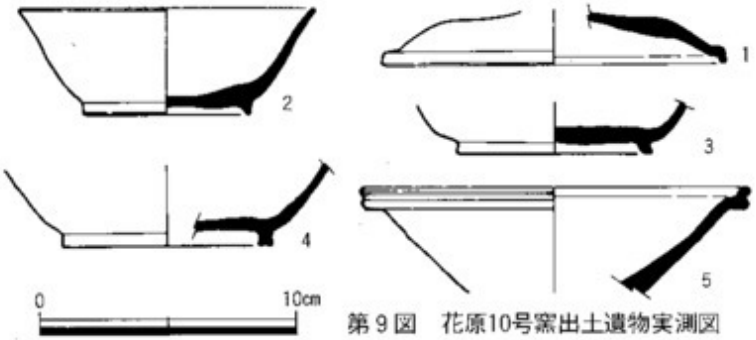
第６図　D地区出土遺物実測図



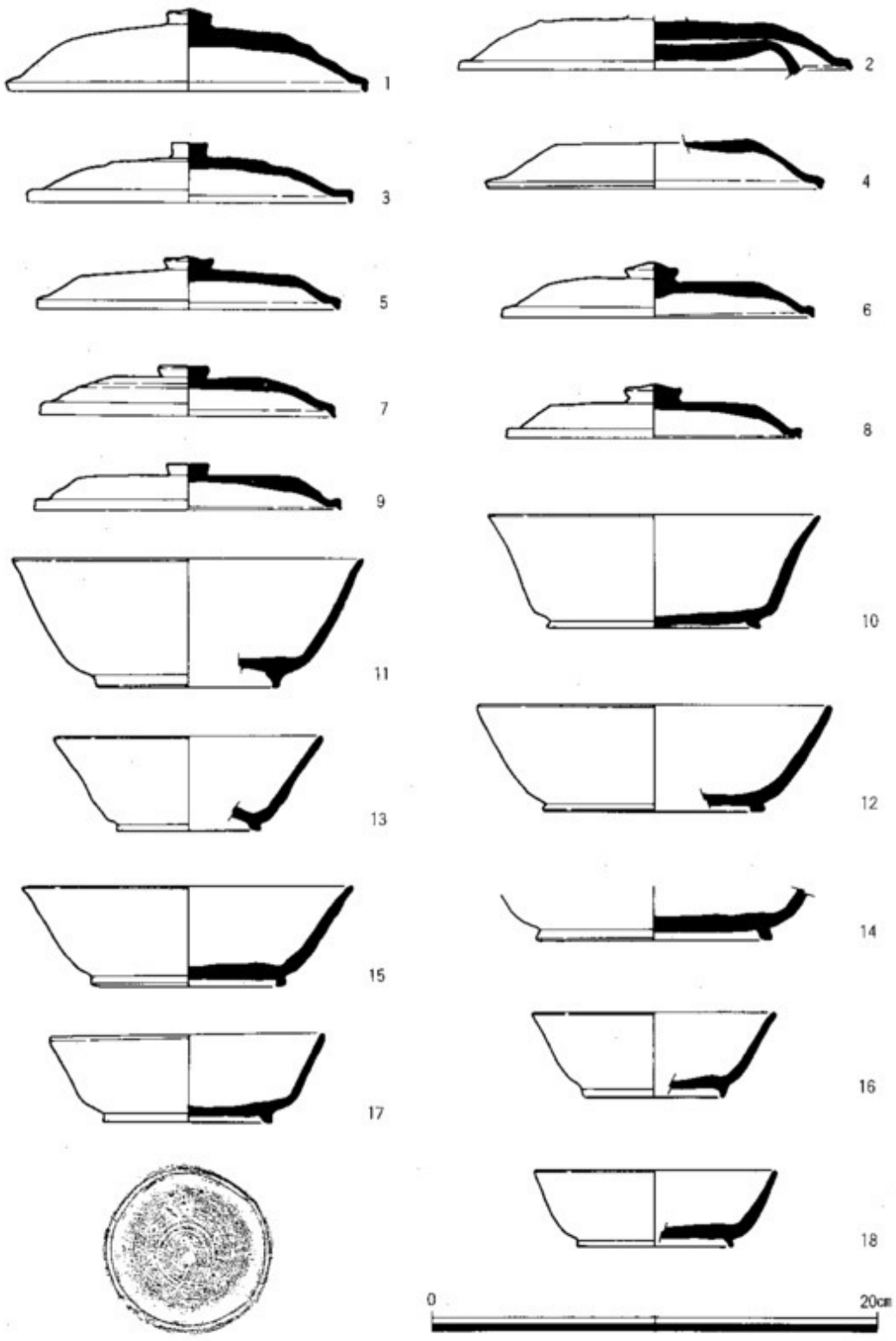
第７図
A･E地区出土遺物実測図



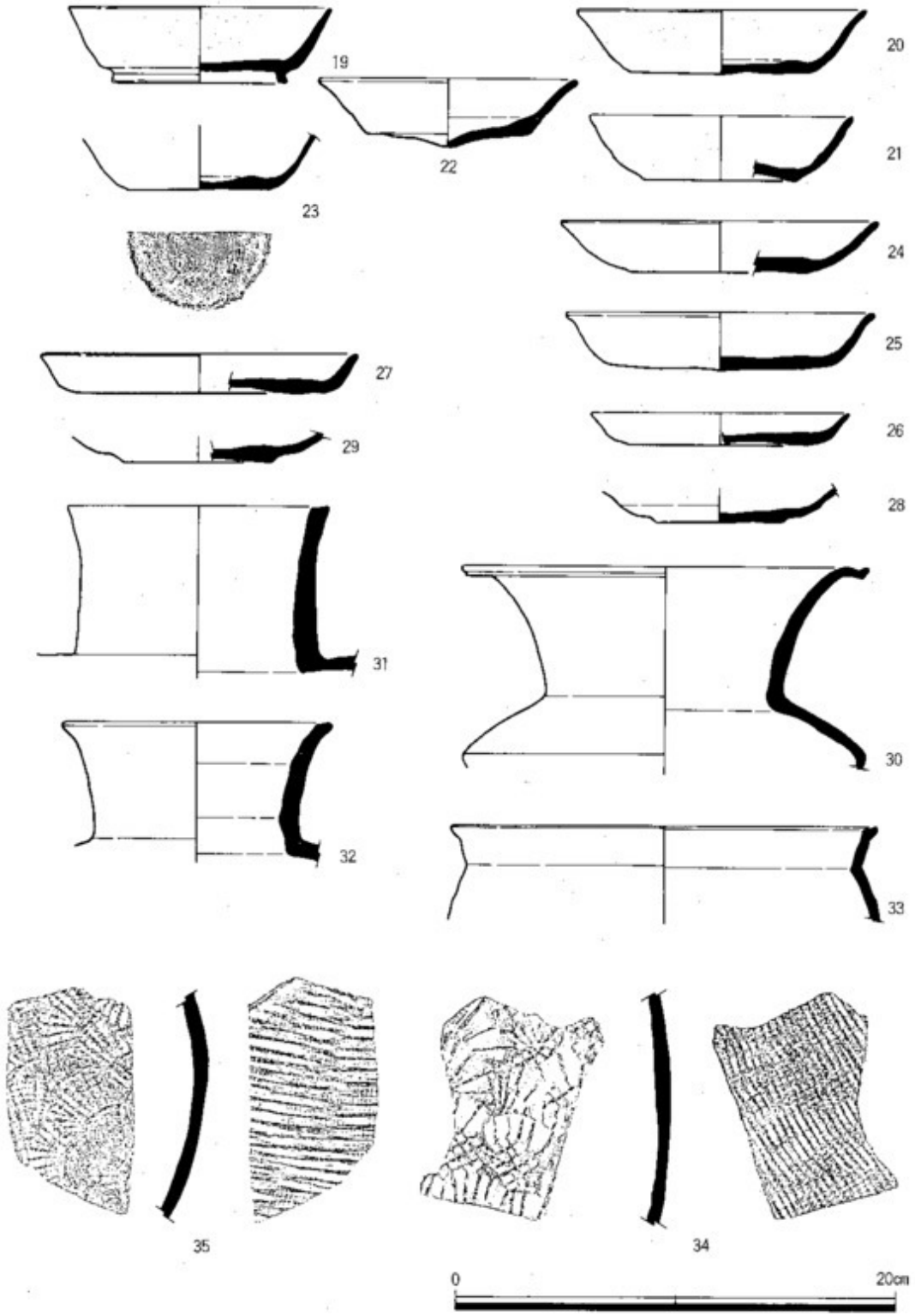
第８図　第７トレンチ出土遺物実測図



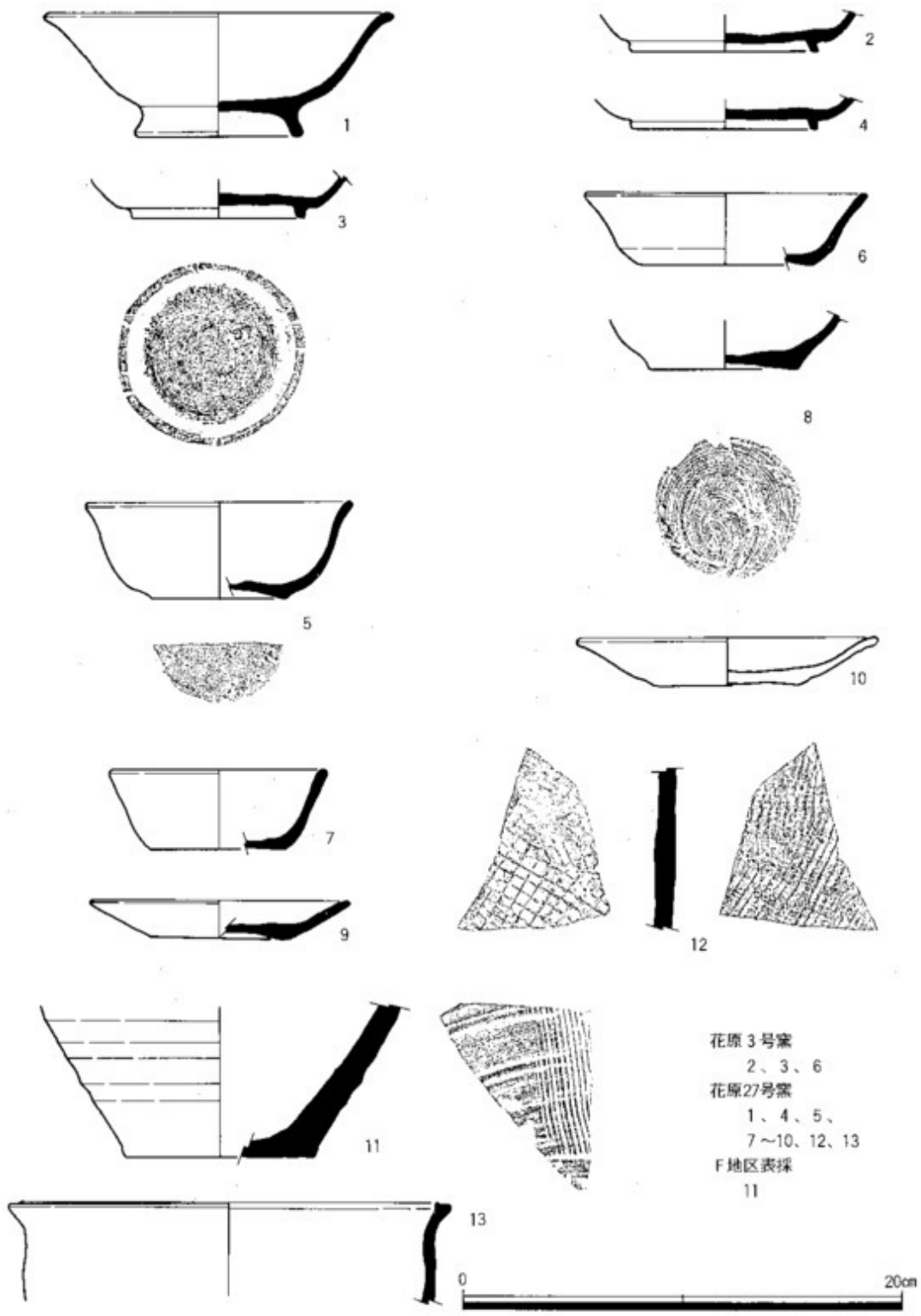
第９図　花原10号窯出土遺物実測図



第10図　C地区灰原出土遺物実測図



第11図　C地区灰原出土遺物実測図



第12図　花原３・27号窯出土遺物実測図

表1　D地区出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
6－1	杯 B b		4.2	○底部平坦で緑部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜めに上も上がり端部欠損。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切りの後ナデ。高台ナデ。	砂粒を含む	堅緻	内－暗灰色 外－青灰色	001
6－2	皿 A 型 c	12.6	2.4	○平坦な底部より外反する口縁部。 ○口縁端部丸味をもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切り。	細砂を含む	堅緻	淡黄灰色	001
6－3	鉢 A b		1.7	○平坦な底部より斜めに立ち上がる口縁部。 ○口縁端部欠損。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切りの後ナデ。	細砂を含む	堅緻	内－灰黄色 外－淡黄灰色	001
6－4	壺 A II c	14.6	2.2	○平坦な底部より外反する口縁部。 ○口縁端部丸味をもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切り。	細砂を含む	やや軟	淡黄灰色	001

表2　花原窯跡群、A・E地区出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
7－1	皿 A c		1.4	○底部平坦で緑部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり端部欠損。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外面回転糸切り。高台ナデ。	細砂を含む	堅緻	灰褐色	003
7－2	杯 B c		2.8	○平坦な底部より斜め上方に立ちとがる。 ○口縁部欠損。	○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面同転糸切り。	細砂を含む	軟	灰白色	011

表3　クトレンチ出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
8－1	鉢	20.4	10.0	○緑部短かく外反する口縁部。端部丸味をもつ。 ○なだらかな器部をもつ胴部へ続く。	○口縁部内外面横ナデ。 ○胴部内面横ナデ、外面不定方向のハケメを施す。内外面一部スス付着。（土師器）	砂粒を含む	やや軟	内－暗褐灰色 外－淡赤褐色	044

表4　花原10号窯出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
9－1	椀 A 皆 b	12.6	2.1	○頂部水平気味。つまみ部欠損。 ○口縁部は天井部よりゆるやかに屈曲し、端部外反気味に丸い。	○天井部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面へラ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	やや軟	内－灰色～淡褐色 外－灰色～黄灰色	025
9－2	杯 B II c	11.6	4.2	○底部平坦で緑部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部外反気味に立ち上がり端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切り。高台ナデ。	細砂を含む	堅緻	内－暗灰色 外－灰色	025
9－3	杯 B b		1.9	○底部平坦で緑部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部欠損。	○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	淡黄灰色	024
9－4	杯 B c		3.1	○底部平坦で緑部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり端部欠損。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切り。高台ナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	023
9－5	擂鉢	15.1	4.2	○底部欠損。 ○斜め上方に立ち上がる緑部。 ○口縁部外反し、端部丸い。口縁端部に1条の沈線を施す。	○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	025

表5　花原窯跡群、C地区灰原出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
10－1	皿 B I b	10.4	3.7	○頂部水平気味。中央に扁平なつまみを貼り付ける。 ○口縁部は天井部よりゆるやかに屈曲し、端部丸い。	○天井部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切りの後ナデ、つまみ部ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	灰黄色	017 027
10－2	皿 A I b	17.75	2.7	○頂部水平気味。つまみ部欠損。 ○口縁部は天井部よりゆるやかに屈曲し、端部外反気味に丸い。	○天井部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面へラケズリの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色～灰黄色	030 056
10－3	皿 A II b	14.6	2.7	○頂部水平気味。中央に扁平なつまみを貼り付ける。 ○口縁部は天井部よりゆるやかに屈曲し、端部丸い。	○天井部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切りの後ナデ、つまみ部ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を含む	堅緻	灰色	013
10－4	皿 B II b	15.3	2.25	○頂部水平。つまみ部欠損。 ○口縁部は天井部よりゆるやかに屈曲し、端部丸い。	○天井部内面ロクロナデ、外面回転糸切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	内－暗灰色 外－灰色	030 031
10－5	皿 B II b	13.7	2.4	○頂部水平気味。中央に扁平なつまみを貼り付ける。 ○口縁部は天井部よりゆるやかに屈曲し、端部丸い。	○天井部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切りの後ナデ、つまみ部ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	精緻な粘土	軟	内－灰色～淡黄色 外－淡黄灰色	031
10－6	皿 A II b	14.1	2.6	○頂部水平。中央に扁平なつまみを貼り付ける。 ○口縁部は天井部よりゆるやかに屈曲し、端部丸い。	○天井部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切りの後ていねなナデ、つまみ部ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	040 042
10－7	皿 B II b	13.3	2.3	○頂部水平気味。中央部に扁平なつまみを貼り付ける。 ○口縁部は天井部よりゆるやかに屈曲し、端部外反気味に丸い。	○天井部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切りの後ナデ、つまみ部ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	019
10－8	皿 A III b	13.2	2.5	○偏平水平気味。中央につまみを貼り付ける。 ○口縁部は天井部よりゆるやかに屈曲し、端部丸い。	○天井部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面同転糸切りの後ナデ、つまみ部ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	013

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
10－9	鉢 AⅡb	13.8	2.1	○頂部水平気味。中央に扁平なつまみを貼り付ける。 ○口縁部は天井部よりゆるやかに屈曲し、端部丸い。	○天井部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切りの後ナデ、つまみ部ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色 内外－（自然釉付着）	020
10－10	杯 BⅠc	15.0	5.1	○底部平坦で糸切痕との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部外反気味に立ち上がり端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切り。高台ナデ。	砂粒を含む	堅緻	暗灰色	005
10－11	杯 BⅠb	15.8	5.9	○底部平坦で糸切痕との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部外反気味に立ち上がり端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ロクロナデ。高台ナデ。	細砂を含む	堅緻	内－淡灰色 外－灰色	018
10－12	杯 BⅠc	16.0	4.9	○底部平坦で糸切痕との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外面回転糸切りが少し見られる。高台ナデ。	精緻な胎土	堅緻	内－淡灰色 外－灰色	034
10－13	杯 BⅡc	12.2	4.3	○底部平坦で糸切痕との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部やや外反気味に立ち上がり端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底面内面ロクロナデ、外面回転糸切りが少し見られる。高台ナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	026
10－14	杯 Bb		2.1	○底部平坦で糸切痕との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部欠損。	○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラケズリ。高台ナデ。	砂粒を含む	やや軟	内－淡褐色～灰色 外－灰褐色	015
10－15	杯 BⅠc	15.0	4.6	○底部平坦で糸切痕との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切り。高台ナデ。	細砂を含む	やや軟	内－淡褐色 外－淡黄灰色～淡灰色	012
10－16	杯 BⅡb	11.0	3.9	○底部平坦で糸切痕との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラ切りの後ナデ。高台ナデ。	精緻な胎土	堅緻	灰褐色	019
10－17	杯 BⅡc	12.4	4.05	○底部平坦で糸切痕との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり端部丸い。いびつになっている。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切り。高台ナデ。	砂粒を含む	堅緻	淡灰褐色	038
10－18	杯 BⅡb	11.0	3.5	○底部平坦で糸切痕との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切りの後でいねいなナデ。高台ナデ。	精緻な胎土	堅緻	内－灰褐色 外－灰色	016
11－19	杯 BⅡb	12.0	3.5	○底部平坦で糸切痕との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ロクロナデ。高台ナデ。	砂粒を含む	堅緻	灰色	019
11－20	皿 AⅢb	13.2	2.95	○平坦な底部より外反する口縁部。 ○口縁端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外面回転糸切りの後ナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	026
11－21	杯 AⅠc	12.0	3.0	○底部平坦で斜め上方に立ち上がる口縁部。 ○口縁端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外面回転糸切り。	精緻な粘土	軟	淡黄灰色	029
11－22	皿 AⅢb	11.8	3.2	○やや平坦な底部より外反気味に立ち上がる口縁部。 ○口縁端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切りの後ナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	031
11－23	杯 Ac		2.4	○平坦な底部より斜め上方に立ち上がる。 ○口縁部欠損。	○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切り。	砂粒を含む	堅緻	淡黄灰色	035
11－24	杯 AⅠc	14.6	2.4	○底部平坦で外反気味に立ち上がる口縁部。 ○口縁端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切り。	細砂を含む	堅緻	内～灰色 外－灰褐色	005
11－25	皿 AⅡc	14.2	2.7	○平坦な底部より外反する口縁部。 ○口縁端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切り。	細砂を含む	堅緻	黄灰色	036
11－26	皿 AⅡc	11.8	1.5	○平坦な底部より斜めに立ち上がる口縁部。 ○口縁端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切りが見られる。	細砂を含む	堅緻	淡黄灰色	032
11－27	皿 AⅡc	14.6	1.8	○平坦な底部より斜めに立ち上がる口縁部。 ○口縁端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切り。	細砂を含む	軟	灰白色	012
11－28	皿 As		1.4	○平坦な底部より斜め上方に立ち上がる口縁部。 ○口縁端部欠損。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラ切り。	細砂を含む	堅緻	淡灰褐色～灰色	026
11－29	杯 Ac		1.15	○やや平坦な底部より斜め上方に立ち上がる。 ○口縁部欠損。	○底部内面ロクロナデ、外面回転糸切り。	細砂を含む	堅緻	灰色	057
11 30	壺	18.6	9.3	○口縁部大きく外反し、端部は上方につまみ上げ丸い。 ○肩部角ばる。	○口縁部、肩部内外面ロクロナデ。	砂礫を含む	堅緻	灰色	020 021
11－31	壺（口縁）	12.0	6.9	○やや直立気味に立ち上がる口縁部、端部面をもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	灰褐色	020
11－32	壺（口縁）	12.4	5.7	○やや直立気味に立ち上がる口縁部、端部面をもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	035
11－33	鉢	19.6	4.3	○やや斜め上方に立ち上がる口縁部。端部面をもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	甘い	内－淡褐色 外－暗灰色	035
11－34	（胴部片）				○内面格子目タタキ，格子目タタキ。 ○外面平行タタキ。	細砂を含む	堅緻	灰白色	057
11－35	（胴部片）		10.4		○内面車輪文タタキ。 ○外面平行タタキ。	精緻な胎土	堅緻	灰色	027

表6　花原3・27号窯出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
12－1	杯 BⅠb	15.45	5.75	○底部やや平坦で糸切痕との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、端部外反気味に先味をもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内外面ロクロナデ。高台ナデ。	細砂を含む	やや軟	灰色～灰白色	053
12－2	杯 Bb		1.7	○底部平坦で糸切痕との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部欠損。	○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切りの後ナデ。高台ナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	054
12－3	杯 Bb		1.8	○底部平坦で糸切痕との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部欠損。	○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ロクロナデ。高台ナデ。	細砂を含む	堅緻	内－灰色～灰黄色 外－灰黄色～淡黄灰色	054

特図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
12－4	杯 Bb		1.4	○底部平坦で縁部との屈曲部に底台を貼り付ける。 ○口縁部欠損。	○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切りの後ナデ。	細砂を含む	堅緻	内－灰色～灰黄色 外－黄灰色	053
12－5	杯 AIc	11.9	4.5	○やや平坦な底部より内湾気味に立ち上がる縁部。 ○口縁端部外反気味に丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面回転糸切り。	細砂を含む	堅緻	灰色	053
12－6	杯 AIb	12.7	3.35	○やや平坦な底部より斜め上方に外反する縁部。 ○口縁端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部外面回転糸切りの後ナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色（一部灰白色）	054
12－7	杯 AIIc	9.7	3.7	○平坦な底部より斜め上方に立ち上がる縁部。 ○口縁端部丸い。	○口縁内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面回転糸切り。	細砂を含む	堅緻	灰黄	053
12－8	杯 Ac		2.3	○やや平坦な底部より斜め上方に立ち上がる。 ○口縁部欠損。	○底部内面ロクロナデ。外面回転糸切り。	砂粒を含む	やや軟	淡黄灰色	053
12－9	皿 AIIc	11.45	1.8	○やや平坦な底部より斜め上方に立ち上がる縁部。 ○口縁端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ。外面回転糸切り。	細砂を含む	堅緻	灰色（一部暗灰色）	049
12－10	杯 AIc	12.3	2.2	○平坦な底部より斜め上方に立ち上がる縁部。 ○口縁端部やや外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ。外面回転糸切り。一部赤色塗彩。わずかにスス付着。	細砂を含む	やや軟	淡明赤褐色	053
12－11	鉢(底部)		(6.9)	○平坦な底部より斜め上方に立ち上がる。	○口縁部内面ロクロナデの後カキメを施す。外面ロクロナデ。 ○底部内面ナデ。外面ヘラ切り。	細砂を含む	堅緻	赤褐色	053
12－12	壺胴部片				○内面格子目タタキ。外面平行タタキ。	細砂を含む	堅緻	内－淡黄灰色外－灰色	053
12－13	鉢	18.8	4.6	○頸部より外反する短かい口縁部。 ○口縁端部面を持つ。	○内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	内－灰色～淡灰色 外－灰色	053

Ⅳ 小　　結

今回の試掘調査で得られた所見を以下にまとめ、若干の検討を加えてみたい。

トレンチ調査により、窯跡3基とその存在を示唆する灰原を2ケ所で確認し、土師器甕と炭を伴出した土坑状遺構がみられた。

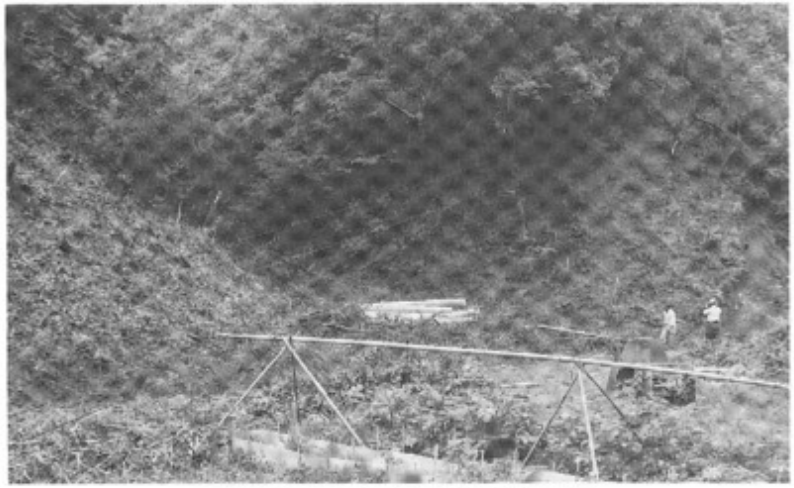
C地区で確認された灰原より検出された須恵器は、蓋杯、皿、広口壺、短頸壺、甕、鉢などがみられ、同一器種にあって、口径、器高に大小さまざまなものがみられた。杯身の底部切り離し法は、回転糸切りの後ナデで調整したものとヘラケズリによるものがみられる。全体にやや小型化傾向にあるのと、下坂窯跡群出土遺物との検討により8世紀後半代から9世紀にかけての時期が想定できる。

花原10号窯は、その検出状態から考えてC地区灰原に伴う窯跡に先行するものと思われるが、時期的な差は余りないであろう。

花原3・27号窯出土遺物は、器種の減少、小型化、粗悪化がみられる。山出窯跡群出土遺物に近似した特徴をもっている。山田10号窯が11世紀末から12世紀初頭と考えられることからみて、花原3・27号窯出土遺物は11世紀代と考えておきたい。

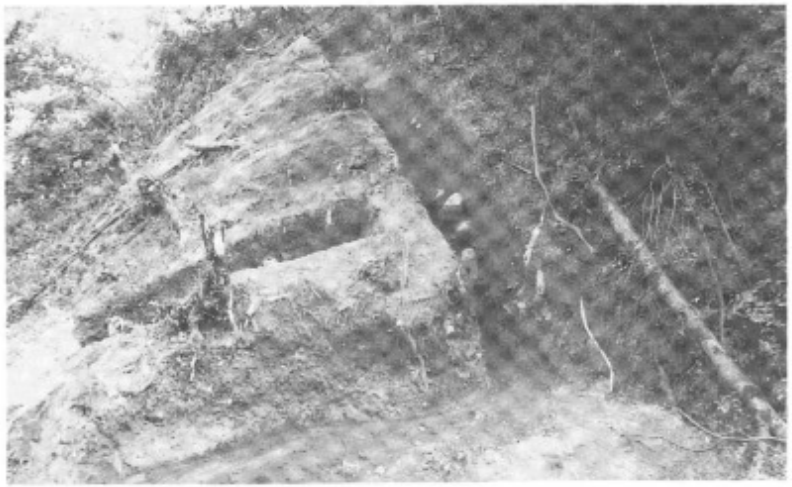
今回の調査で以上の所見が得られ、所期の目的は充分達成されたものと思われる。次年度以降、当該地の本調査が行われることにより資料に対しても充分な検討がなされるものと思われる。調査に際し、発掘調査から報告書作成にいたるまで、多くの方々の御協力、御教示を受けた。記して謝意に代えたい。

図　　版



〔1〕第27・28区調査前全景(東より)

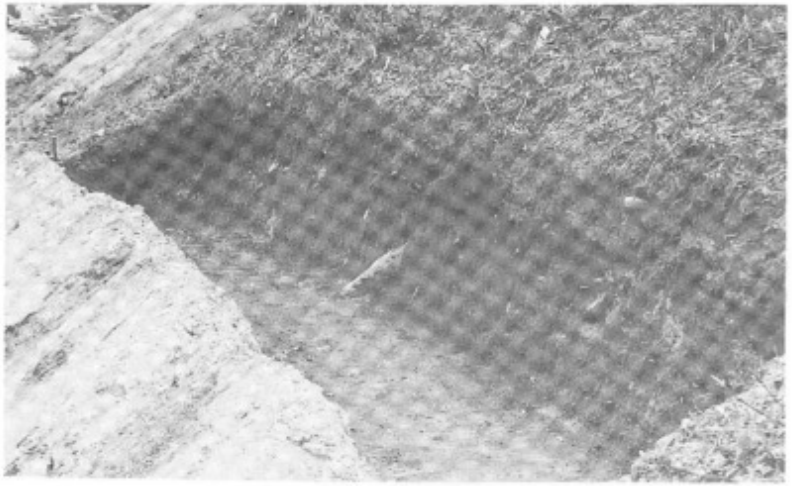
〔3〕第6トレンチ完掘状況(北より)



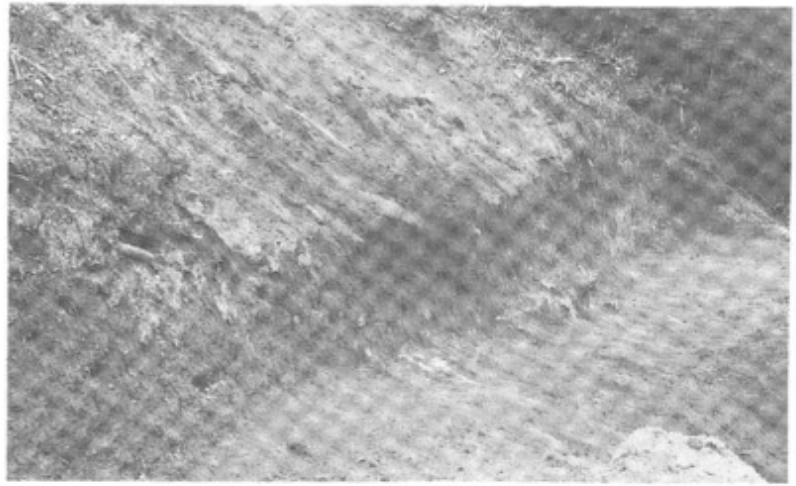
〔2〕第1・1'トレンチ完掘状況(北より)

〔4〕第5トレンチ完掘状況(西より)

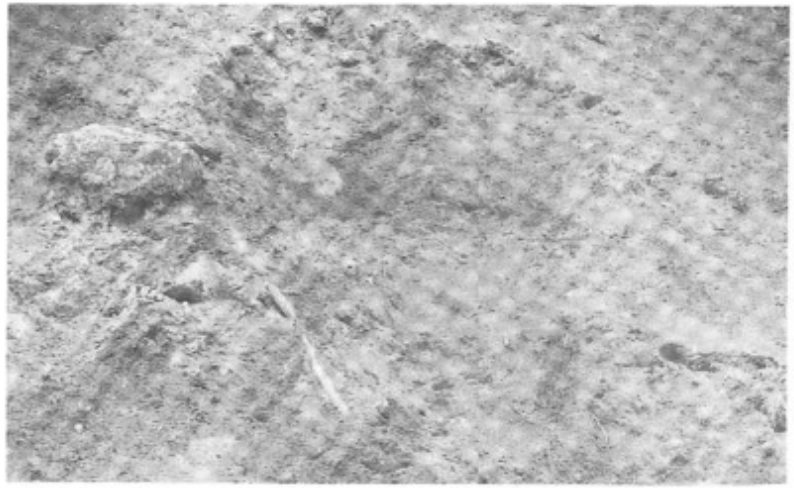
〔1〕第30～32区調査前全景(東より)



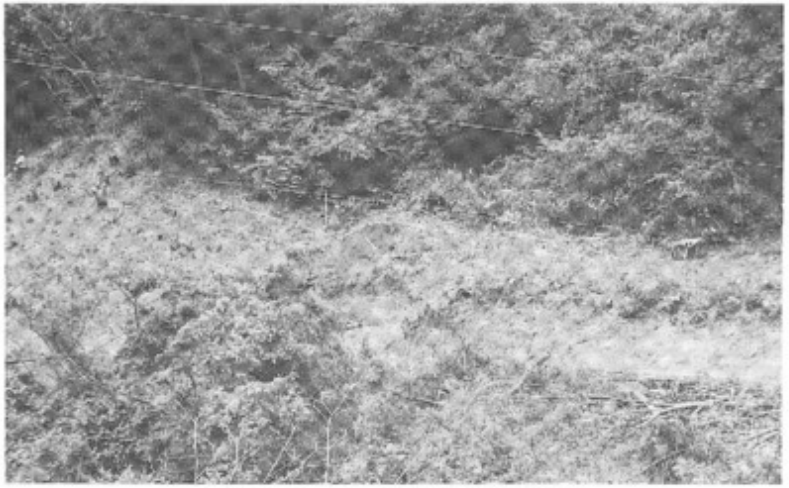
〔2〕第8トレンチ完掘状況(北より)



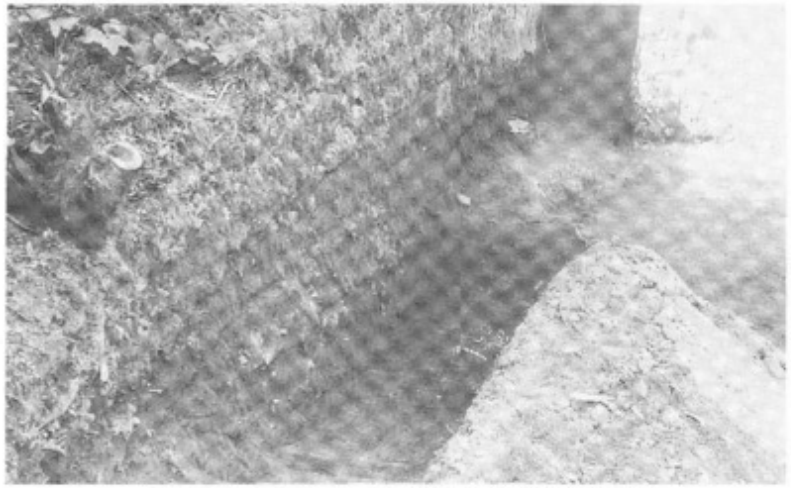
〔3〕第7トレンチ西壁土層断面状況(南より)



〔4〕第7トレンチ西側拡張部、土坑状遺構(東より)

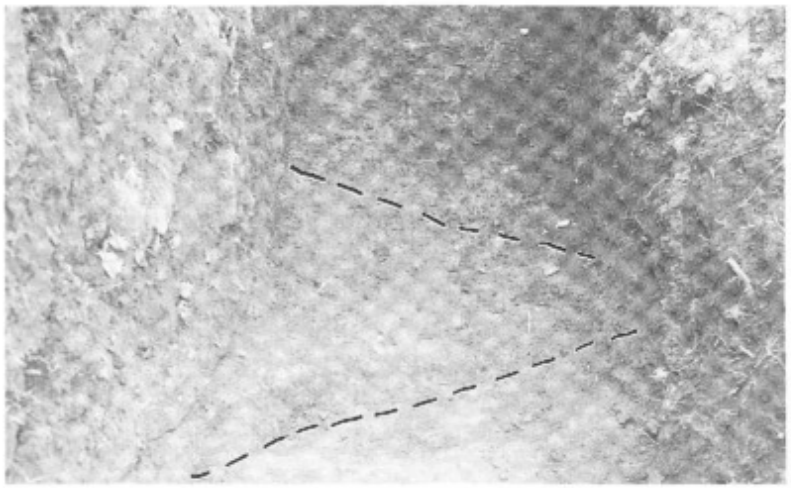


〔1〕第33・34区調査前全景(東より)

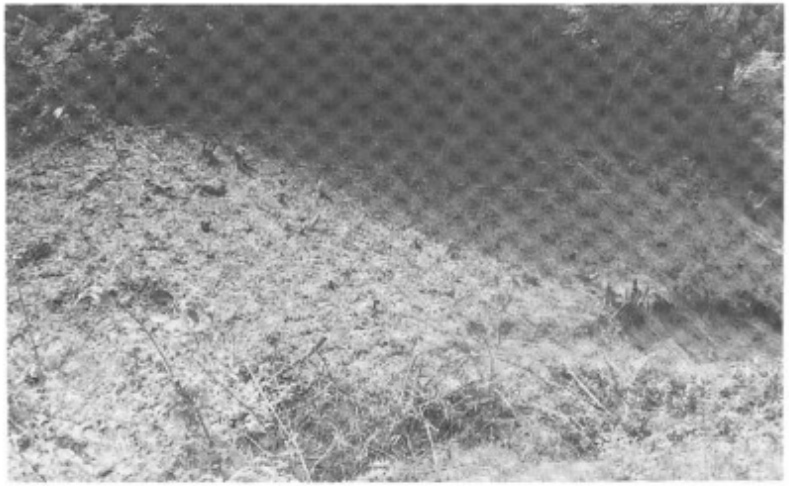


〔3〕第2トレンチ、灰原土層断面状況(南より)

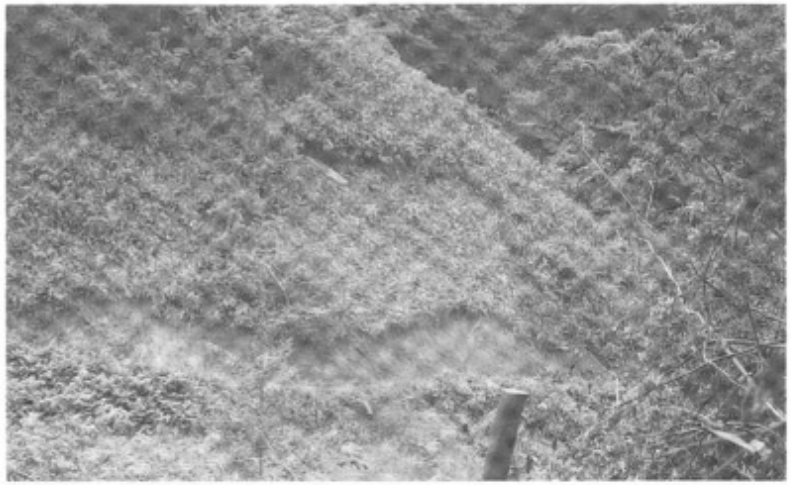
〔2〕第2トレンチ完掘状況(北より)



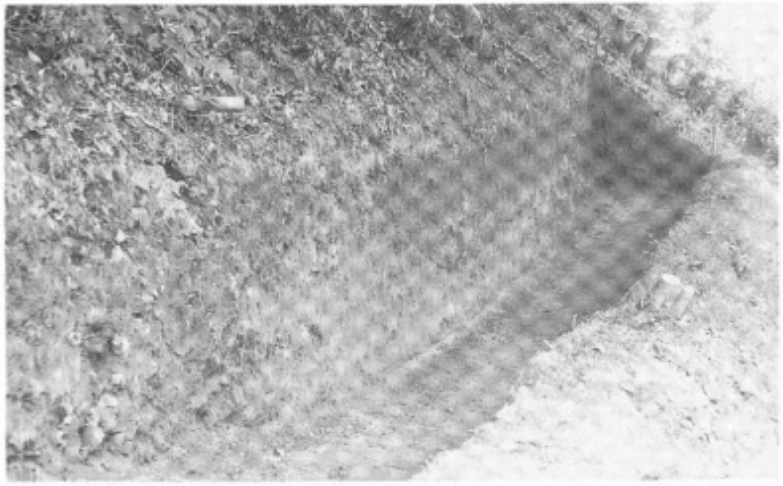
〔4〕花原10号窯窯体床面検出状況(南より)



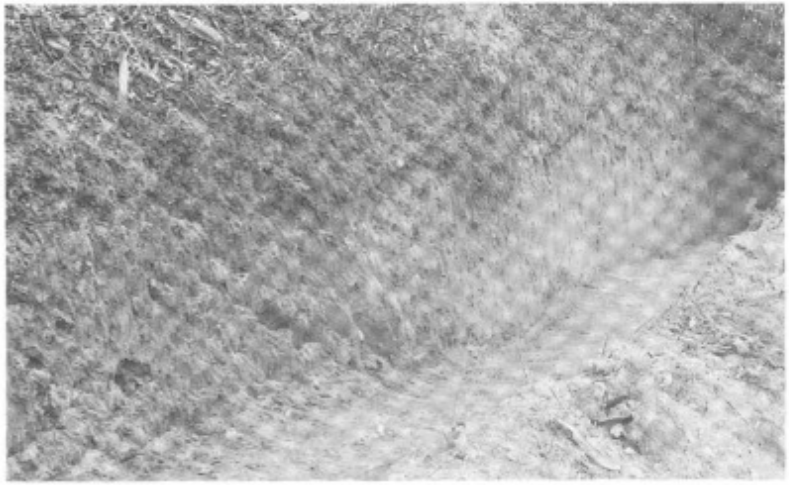
〔1〕第35区調査前全景(東より)



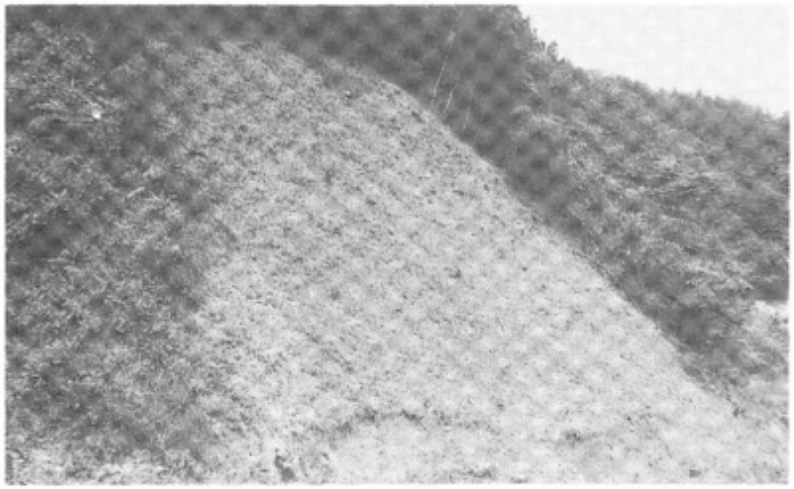
〔3〕第37区調査前全景(東より)



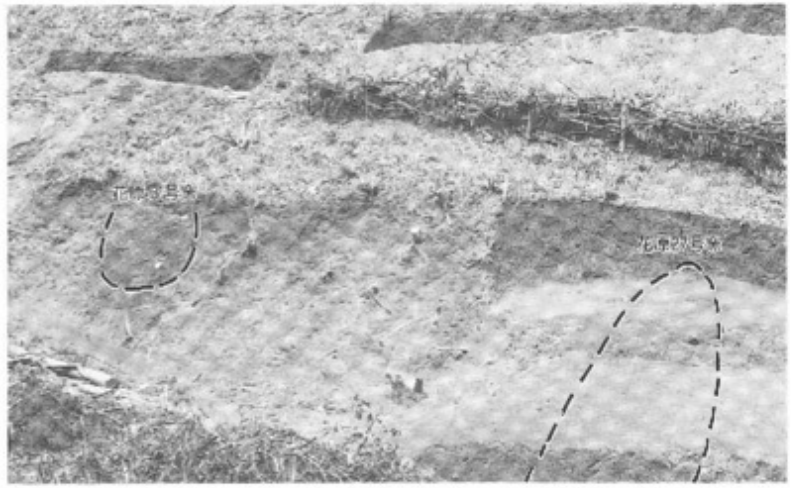
〔2〕第3トレンチ完掘状況(南より)



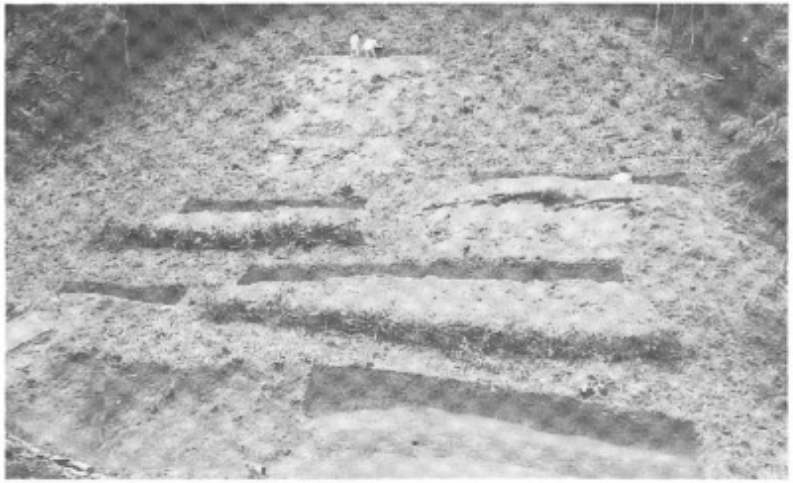
〔4〕第4トレンチ完掘状況(南より)



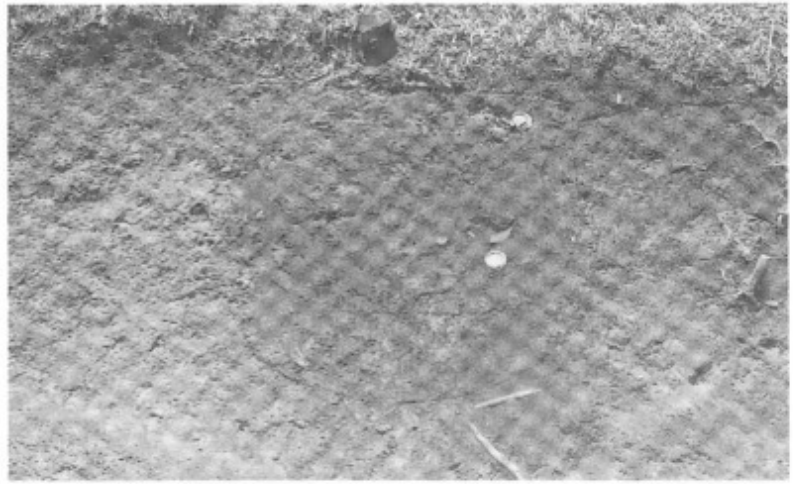
〔1〕第42区調査前全景(南より)



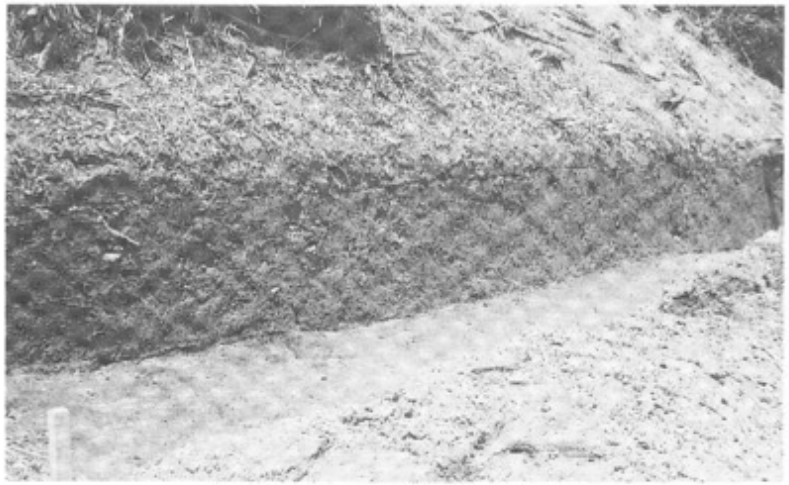
〔3〕花原3・27号窯検出状況(東より)



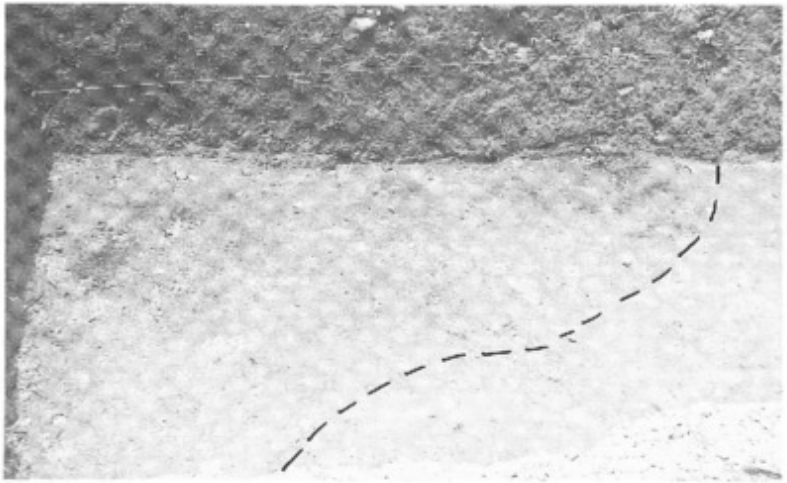
〔2〕第12~17トレンチ完掘状況(東より)



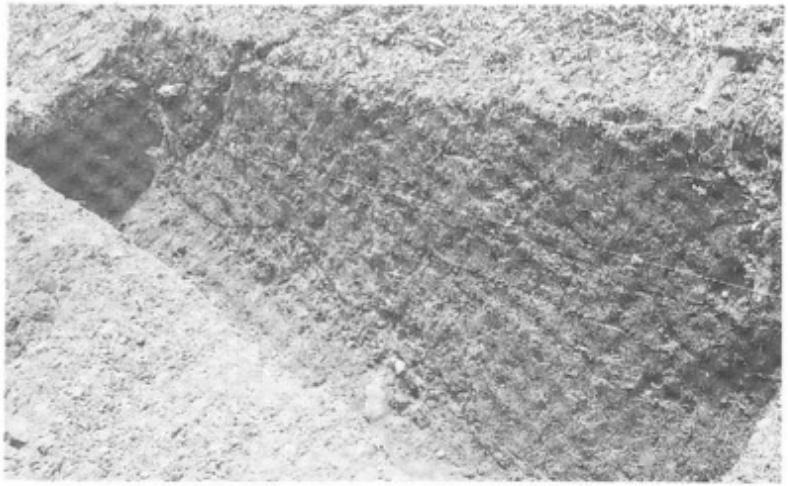
〔4〕花原3号窯窯体断面状況(東より)



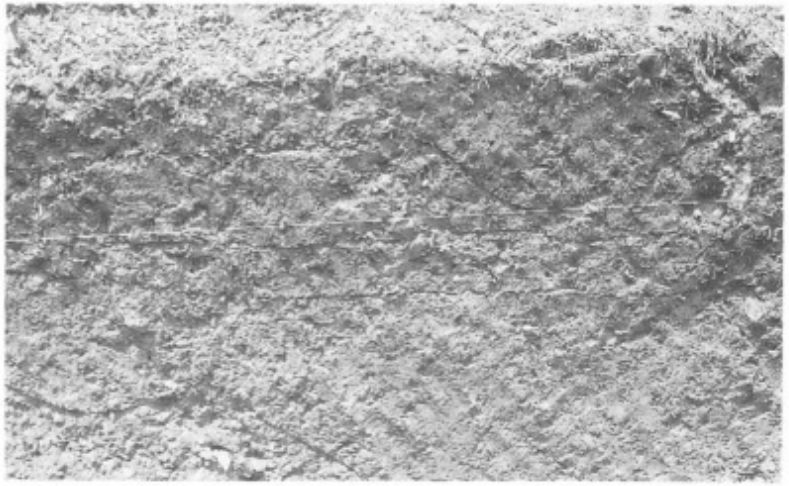
〔1〕第12トレンチ完掘状況(南より)



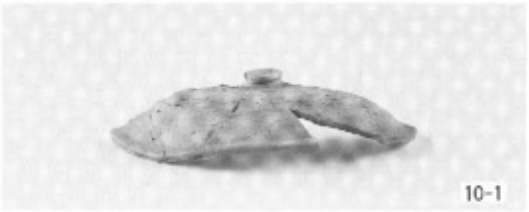
〔2〕第12トレンチ南西隅、炭・焼土検出状況(東より)



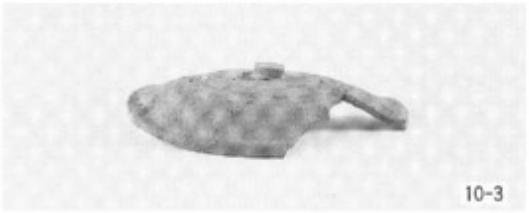
〔3〕第13トレンチ完掘状況(北東より)



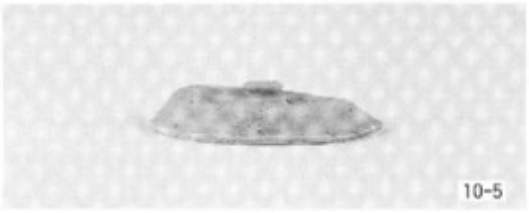
〔4〕第13トレンチ西壁土層断面状況(東より)

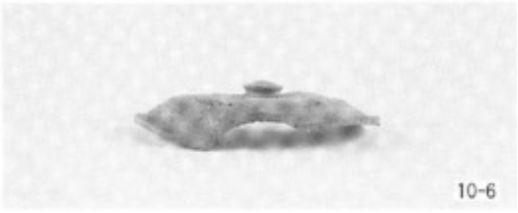

10-1

10-2


10-3

10-4


10-5

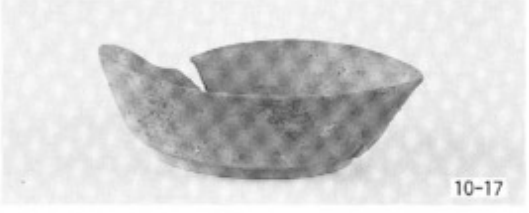

10-6

10-7

10-8

10-10

10-16


10-17

10-18

11-19

11-20

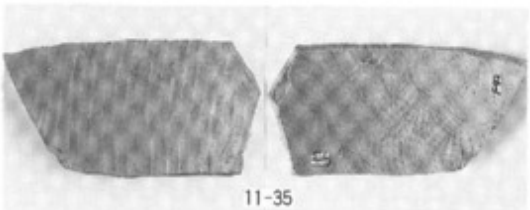
図版　8

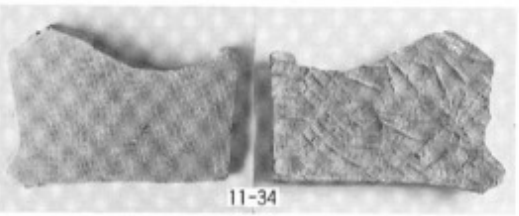
11-22

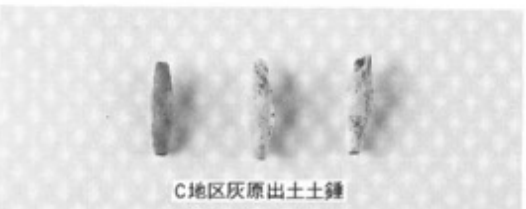
11-24

11-25

11-27


11-35

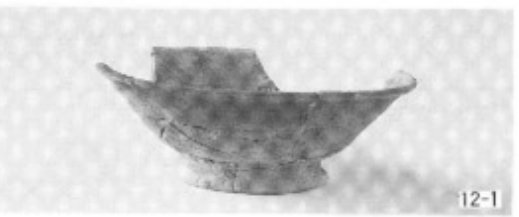

11-34


C地区灰原出土土錘

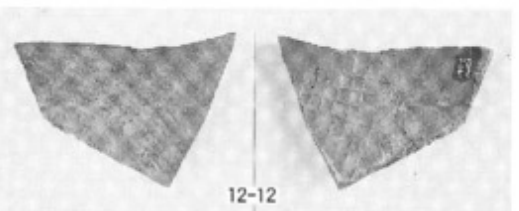
9-2

11-30

6-4


12-1

8-1


12-12

郡家町文化財報告書11

花原窯跡群・I

発　行　1989・9

発行者　郡家町教育委員会

〒680-04

鳥取県八頭郡郡家町郡家

TEL (0858) 72－0201 (代表)

綜合印刷出版株式会社